

屋形草紙

第一編

綾丸月代編(イラスト版)



檜
渉



高崎 律子

十九歳 身長一五八センチ

元信用金庫職員

副支店長の不正に巻き込まれ懲戒解雇。
寮を追われ、公園で途方に暮れていた
ところを木下伊織と出会う。

高崎 綾丸

十九歳 身長五尺二寸

下屋形 別式女

木下伊織に見出され、
新たな名と居場所を与えられる。

第一章 公園



寒い。暗い。

ここは板敷の部屋？

冷たっ！

床板の冷気が素足に伝わる。

あれ？なんで私、裸足なのだろう？

裸足？

太腿？

ん？は？裸？

え？白い布？

なんか履いている？

視線を上げていくと

自分の胸と桃色の乳首が見える

え？わ、わたし、やっぱり裸？

え？えっ？えー？

両手で身体を確かめる。

え？下もなにも履いてないの？

両手で尻に触る。なにか硬い綱のような手触りがある。

慌てて視線を下げていくと

股間に白い布が食い込んでいる。

両脇に続く白い綱は硬く捻りあわされている。

な、なに、これ？

捻り込まれた両脇の綱を両手で触って確かめていく。

捻った白い綱はきれいに絡み合ったまま尻へと続いていき、
割れ目に硬くきつく食い込んでいる。

え？なにこれ？ふんどし？

なんで私、褌締めているの??

蠟燭の灯しかないようで、
遠くは暗くて見えない。

目の前に同じような年頃の女性がこちらに背を向けてしゃがんでいる。
自分と同じく、やはり裸で白い褌を尻にきつく食い込ませている。

寒いのに、汗をかいて肩も背中もそして剥き出しの尻も蠟燭の灯で輝いている。

女性は板敷に置いてある大きな四角い石を持ち上げようとしているみたいだ。
うんうんと力んで白い息を吐いている。

「綾丸！何をしている！手伝わんか！」

女性は振り向くなり、私を叱った。

あ、あやまる？誰それ？

「え？私のこと？」

「早く！来ぬか！」

「え？あつ、はい」

「もうひとつ積むんじゃ。さ、そちら側から持て。早く！」

「はい！」

いったい何なのよこの人。

女性と反対側にしゃがみ込む。

大きな四角い石。

重そう。

こんなの二人で持てるかしら。

「せーのっ！」

石の片側を両手で抱えている目の前の女性と目が合った。

きれいな顔。

こんな寒いのに顔じゅう汗だらけだ。

えっ？ うん？ は？眉毛が無いわ、この人！全部剃っているの？

えっ！えっ！何、ちょっと待って！

この人、なんで頭剃っているの？

なに？なに？なに？この人！

女性でしょ？

なんで丁髷？？で、裸？

え、なんで？なんで？なんで？

石を抱える両肩、両腕、小ぶりで形のよい乳房は汗で光っている。

桃色の乳首が美しい。

「いくぞ、綾丸！せーの！」

おっ！重い！

冷たい石のザラリとした手触り。

丁髷に白禪の女性と、すごく重い石をよろよろ運ぶ。

「ここにそろーっと置くのじゃ」

視界に、艶々と光る頭。

別の人？座っている？んっ？丁髷？

この人も女なのに丁髷？？

きれいな顔のおばさんだ！

おばさん苦しそう。眉間にしわを寄せて、歯を食いしばっている。

髷は乱れ、幾筋もの髪束が首筋に張り付き、剃った頭から汗が流れている。

乳房の上と下の周りを縄で縛られ、先っちょの黒い乳首がピンと上を向いている。

後ろ手に縛られギザギザした形の板の上に禪姿で正座している。

この人、拷問されているのかわ。

「んっ！んぐつつつ！あ！はあっ！」

きれいな顔のおばさんは苦痛で身体をよじるが両膝には石が二つ載せられている。

しかも、上半身もきつく縛られているため身動きできない。

「だ、大丈夫で、ですかっ？」
思わず声に出た。

「だ、だっ大丈夫よ、綾丸」
「き、きっ、気にしないで…ちよ、頂戴よ、あ、あな、私たち」

「あ、あなたたちはお、御役目なのだから、し、しっ、つかりと勤め、るのよ。
さも、ないと、ね、ねえさんに叱られてしま、う、わよ。き、きく、菊ちゃんも、
お、お気張りなさ…」

汗だくの丁髷姿の女性はそう言って大げさに片目を瞑る仕草をした。

え？いま、このおばさんウインクした？
なんで、ウインク？？

反対側に立っている丁髷姿の若い女性は泣いていた。

なぜだか私も涙がいっぱい出てきた。両手で顔を覆って泣いた。その指の先の感触はザリザリ、ジヨリジヨリしていた。

え？ま、ま、まさか？？

両手で顔をなぞる。

ぺたぺたと自分の顔を触る。

眉毛のあたりが、ジヨリジヨリする。

眉毛が無い！

剃り落としている？

え、なんで？

これはまさか、もしかして、まさか？？

そのまま指先を眉から額、額から前頭部へと恐る恐る伸ばしていく。

ザリザリ、ジヨリジヨリ

感触が指先から感じられる。

あ！は！私も頭を剃られている？

両手で頭を触る。

頭頂部は髪が無い。

剃られていてザリザリする。

横髪は後ろで束ねて結ってあるようだ。

なーんだ、私も彼女らと同じ。丁髷で禪なんだ…

視界が急に暗くなった

真っ暗になった

寒い…

どこからか強い檜の香りがした。